

インドネシア (ジャワ島・バリ島) の旅日記

——ボロブドゥール寺院遺跡等を訪ねて——

長 関 和 男

昭和58年8月1日から7日間、全日本インドネシア協会主催の「インドネシアツアー」旅行に参加した。海外旅行の機会がありながら、何らかの理由で実行できず今回が初めてである。インドネシアは社会情勢が不安定な国であると聞いたり、言葉や食事に不安があるので随分ためらっていたが、協会役員の友人の強い誘いと、世界最大の寺院遺跡ボロブドゥールや他の寺院遺跡等の見学が数多く組まれていることから、先の不安より行きたいという意志が強く働き参加することとした。

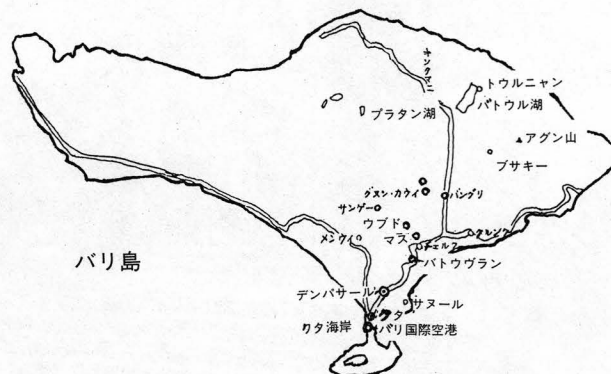
第1日目 (バリ島)

大阪空港→香港→ジャカルタ経由デンパサール国際空港 <泊>

第2日目 (島内観光)

時差2時間、早朝より専用バスでバリ島の山側の道を内陸部に進む。窓外に広がる水田や椰子林・富士山を連想させるアグン山(3,142m)が展開する。この山は、島内最高峰で恐ろしい力を秘めた活火山であり、1963年に大爆発を起こし多くの犠牲者を出している。水田の区画はきれいになされ、農民達は野良仕事に精を出している。道には自転車や単車が多く走り、寺院へ供物を運ぶ婦人の列があり、川で裸になって水浴する人々の光景等は、島民の生活そのものという感があり新鮮に映る。

島で最初の王国があったキンタマーニ山に着く。バリ島の屋根といわれるとおり、眼下にバツール



第1図 バリ島図

山の火口湖や、島の南半分を見はるかす大パノラマが展開し、絶景である。この高山の村に水浴場が残っていて今でも使用されているし、村全体が何か神秘的な雰囲気を持っている。この村からバツール湖畔に下り、屋形舟風の舟に乗り少数民族が住むトゥルニャン村へと向う。この村では今でも風葬の習慣をもち、死者を火口近くに捨てて自然の風化にまかすというもので、数月前の風葬現場に足を運ぶことにした。竹編の山形屋根の覆いの下に、首から布を覆っただけで放置されている生々しい光景は、海岸地方の豪華な火葬儀式(墓地に埋め、再度掘り出して立派な塔に乘せ火葬する)とは好対象である。

舟で対岸に渡ると、溶岩が迫る殺伐とした岸边に温泉が湧いている。溶岩の岸部沿いに舟着場に帰る。土産物を売る人々に追われるように車は南下し、タンパッシリンの町の郊外にあるグヌン・カウイ王墓に着く。この王墓は11世紀に建立されたもので、岩を削って造られヒンズー寺院の形をしている。この近くのティタエンブルの“聖なる泉”は枯れることなく11世紀から生きている。ここから南に続く村々は芸術の宝庫で、ウブド村には画家・音楽家・彫刻家が住み、村の画室で作品の製作に励んでいる(即売)。隣の村マスでは、バリ島の木工彫刻品生産の中心地で、黒檀・紫檀等の高級木材を原料として、仏像や神・動物などを製作し即売している。南隣のチルク村では、金・銀細工の店が建ち並び、指輪など装飾品の製作(即売)をしている。

第3日目 (自由行動) <オプションルツアー>

ブサキ寺院コースに参加。専用バスで宿舎から近いサヌール村へ、村の寺院で島の代表



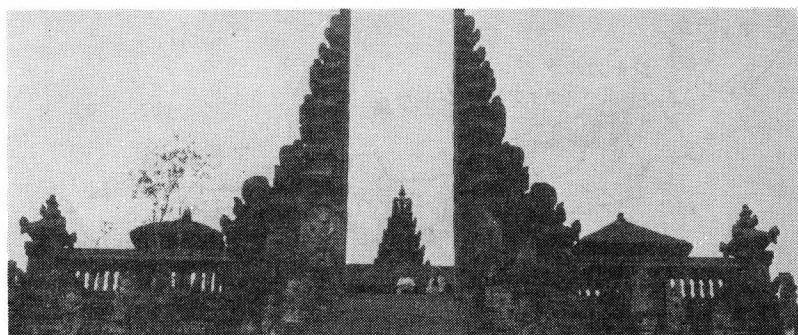
第2図 バロンダンスの一場面(他の踊りも事前に予備知識を持たないと解りにくい)

的なバロン踊りを観賞する。バロンとは善の象徴で人の美点を表現する動物(野生の猪・虎・象等)。悪を表現するラングダは、黒い魂と魔女を支配し子供を喰べる。そこで、バロンとラングダの闘いが始まりバロンが勝つという舞踊である。伴奏はバリ楽器ガムラン(打楽器)で、踊りと言葉に合わせて演奏される。こうした踊りはこの島の生活にとって欠くことができないもので、どの村にも踊りのグループがある。物語りは、内容が勝利と敗北・善と悪の永遠の闘争・愛と憎しみというものが多いようである。

島の村々には、必ず三つの寺院があって村民全体でこれの管理がされる。寺院の一つは祖先を祀るもの(死)で、第2は村民のためのもの(生)、第3は魂の休息のためのもの(神)であるという。また、寺院の祭りは210日毎に行なわれるが、これはバリ暦が1年210日(1週5日)で計算されるため、210日目に創立日の祭が来る。従って、島のどこかの村では必ず祭りが行なわれている。

島の中央部の町バングリーにあるケーン寺院は、広い境内に数多くの塔が並びその一つ一つがそれぞれ別個の神に捧げられたもので、重要な神ほど塔の階層が多く高くなるという。中央に11層の一きわ高くそびえる塔は、ヒンズー教の最高神シヴァ神に捧げられたものである。

ここから北東に進みブキ・ジャンブル丘の斜面に、階段状に造られた棚田が窓外に続く



第3図 “母なる寺院” ブサキ寺院遺跡全景バナタラン・アグンのパゴタ状の高い尖塔

が、起伏の多いこの地方では棚田が多く、椰子の葉影を映した優美な水の階段といえる。

やがて聖なる山グヌン・アグンの斜面に忽然と現われるブサキの母なる寺院は、島で最も古く(9～10世紀)最大の寺院といわれ、いくつかの寺院や建物から形成されている。主要な寺院の中でもプラ・バナタラン・アグンが万人の最も偉大な寺院とされ、パゴダ状の高い尖塔がいくつもあり、天までとどく高い山を象徴していると聞く。この寺院群は、1963年のアグン山大噴火で祭りの日というのに奇跡的に災禍を免れたのである。この寺院を取巻くように数々の宗教的建造物が点在するが、全部を見て廻れなかった。

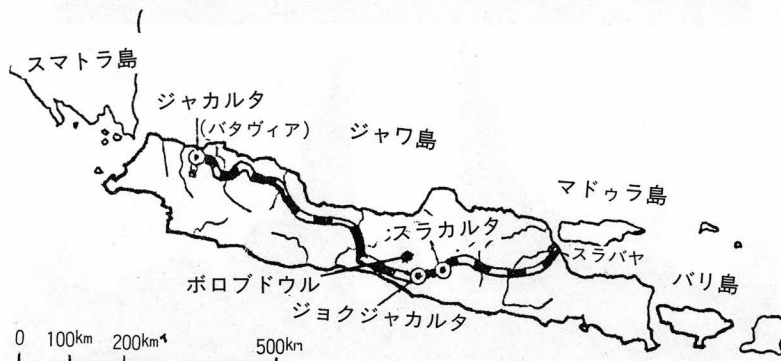
各寺院には必ず三色の布が見られ、バリの宗教がブラマー神(創造のための力を持つ)、ビシュヌ神(保護する力を持つ)、シヴァ神(破壊のための力を持つ)の3神を崇めるヒンズー教であるからで、赤色がブラマー、黒色がビシュヌ、白色がシヴァ神を表わしている。

帰路途中のタンパッシリン村郊外にあるグヌン・カウイの王墓に立寄る。11世紀に岩壁を削って造られ、ヒンズー寺院の形をしているのが特徴である。ここから南に向けて考古学的遺跡ブラーバトウ、クトリ、ニエンプトリーが群集しており、ブジュンという村には約2千年前のブロンズ製の太鼓があり、ゴア・ガジャには正面に彫刻を施した洞窟の中に、11世紀頃の仏教徒の庵もあるが、立寄れなかったのが残念である。

夜はケチャというバリ島の群舞を観賞する。寺院の境内を舞台として照明が燭台の松明と月光という中で、他のバリ踊りとは異なって伴奏がなく150人のサロンを巻いた男性が、“チャッチャッチャッ”と舌打音を発するだけである。主演ラマは妻をラワナに誘拐され他国に連れてゆかれる。猿軍の王スグリワがラマのために猿軍を率いてラマの妻を救出するという物語りで、踊り子が体を揺らしたり、回転したり、座ったままで前後に滑るように進んだり、全体が一体になってうめいたりする様は、ドラマチックな効果を与え印象深く残る。

第4日目 (ジャワ島)

デンパサール(ガルーダ航空)→ジョクジャカルタ <ジョクジャ市内観光>



第4図

ジョクジャカルタは、ジャワ島の中部に位置し学問や文化の中心地である。

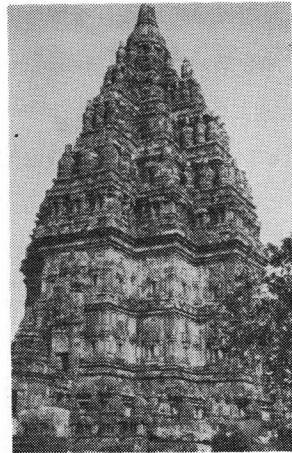
1945年、インドネシアが共和国独立宣言をしたことからオランダと戦争になり、1949年12月にオランダが統治権を共和国に委譲することになり、インドネシア共和国が独立したわけですが、この独立戦争に大きく貢献したハメックブオノ9世に敬意を表して、ジョクジャカルタが特別区とされハメックブオノ王に行政が任されている。

18世紀に建造された宮殿に現在の王が住んでいるが、宮殿の入口にはヤリを持つ人物の石像がある。普通の宮殿が壮大な造りで権威を示そうとしているのとは違い、外観上は意外に質素に感じる。高さ4m・1辺1kmの石べいで囲まれ、5つの門を有するが飾りはなく、むしろ内部の金箔による精巧な装飾を施こした建物や、その配置・大理石の床・金箔で縁取りした鏡や調度品・水晶を使った照明器具等、そして次々に展開する庭園によって権威の存在が感じられる。

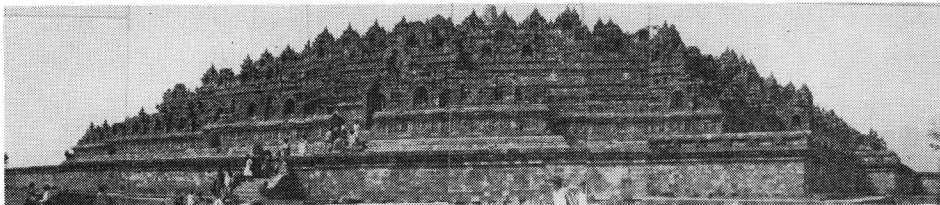
宮殿内には博物館が2つあり、絵画・初代王と現王の写真・外交上の贈物の数々(日本の九谷焼等もある。)・そして門外不出の伝来の家宝などが収められている。この宮殿の裏手にタマン・サリー(水の王宮)があり、かつて初代の王の慰安と瞑想の場所で、一度再建されたが今は廃墟に近い状態にある。当時ここに住んでいた数家族を追い出せないまま今日に至っているからであり、現在でも土産品を売りつつ生活している。踊りの練習場や瞑想室・地下照明・水泳用プール・礼拝堂等があることで当時がしのばれる。

第5日目 (終日遺跡見学)

専用バスで、スラカルタ方面に向う道筋に、ボロヴドゥール寺院遺跡と並び称されるプランバナン寺院遺跡群に着く、ここはジョクジャの東17kmのプラバナン平原に位置し、かつてこの地に威容を誇った聖堂は200余といわれる。



第5図 プランバナンの寺院

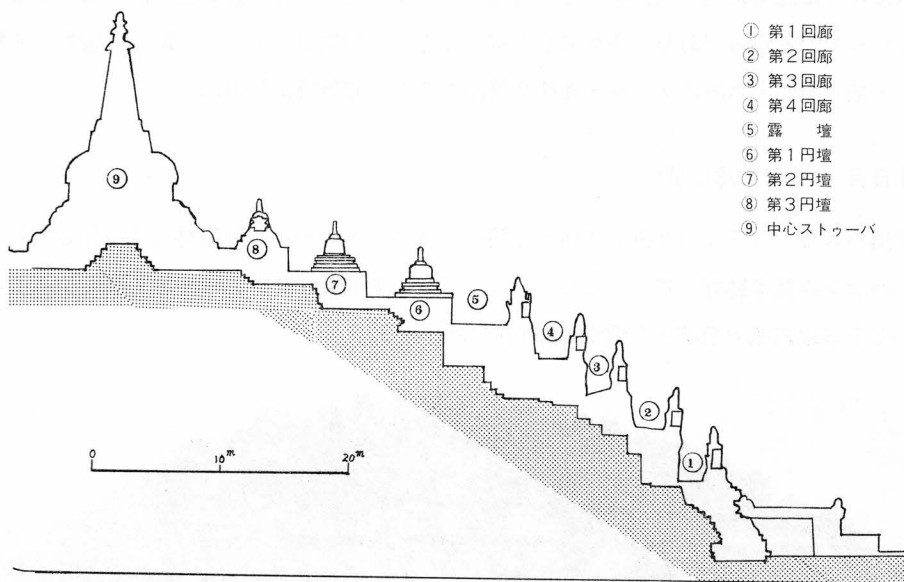


第6図 ボロブドゥール寺院遺跡全容

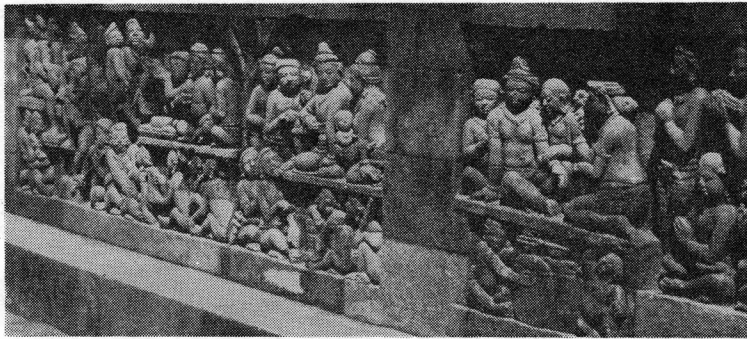
今ではその名残りを留めているに過ぎないが、緑の田園に囲まれて聳え立つ寺院はシヴァ神を祭った優美な神殿で9世紀～10世紀の造営である。外面の石壁は20を数え、壁面の彫刻は力強い浮彫と、その繊細さは千年前のものとは思えない。中央中庭には、プラーマ・ビシュヌの両神の聖殿と他の神の小神殿があるが、いずれも優美なものである。

この周辺にも小さな神殿が数々あるが、廃墟のまま放置されているものや再建されたものもある。また、仏教寺院プラオサンの他にメントッド寺院・パワン寺院が存在し、一方ではヒンズー寺院ロロ・ジョングラン及びカラサン等も存在し、二大宗教が平和共存していたことを物語っている。

ジョクジャに戻って昼をとり、北西42kmの地点にあるボロブドゥールの仏教寺院遺跡に向う。ボロブドゥールの寺院は、世界最大級の寺院遺跡で紀元800年頃に一世紀延1万人の労力を費やして建造されたという。建造は、仏教の一派タンドリ派(大乘仏教)の分派、サイレント皇子が当たり、その後追放されて寺院が廃墟と化す。1814年に発見されてはいるが、1815年にイギリスのジャワ総督が密林の中で、火山灰に埋もれていたのを再発見し、清掃と若干の修復を行なっている。その後1834年・1850年・1873年と多少の修理を受け、1880年から本格的な保存研究がなされる。1908年～1911年にオランダのフワン・エルブによって修復工事が行われたが、崩壊が続いていたことから1926年～1940年にかけて保護対策の探究が続くも実践に至らず、1968年にユネスコ憲章に基づき国際的な保存活動として修復保存工事体制が確立し、実に14年の歳月をかけて修復されたのです。(1982年)



第7図 ボロブドゥール寺院遺跡断面(朝日旅の百科より)

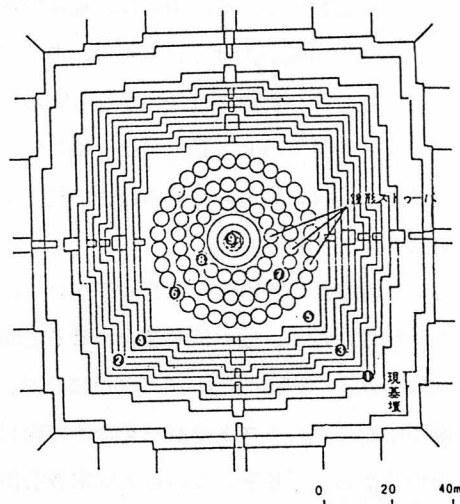


第8図 ボロブドゥールの寺院壁面の彫刻の一部 仏教や猿などの浮き彫りで飾られたボロブドゥール遺跡のテラス7段のうち、下の4段が仏陀の生涯と教えを描く。

寺院はチャンデイ・ボロブドゥール(丘の上の寺院)とも言われ、人工の丘の上に築かれたピラミッド状の建物で、下方が方形で一辺約120mあり、石のブロック無数で積み上げられた基壇が4層なる。基壇に回廊が廻り、上に登るにつれて円形基壇となる。そして円壇の中央には、地上40mの釣鐘状ストウバ(仏塔)が聳えている。このストウバを数々の石仏や彫刻石材・彫刻壁画で飾ってあるから、巨大なる石造の仏教寺院であり宗教芸術作品であるといえる。

この巨大な石造仏教寺院が、奈良東大寺大仏殿と創建時代を同じくしているが、石造と木造という材料の相違や、東大寺の使用木材と仏像が巨大であるのに対し、この寺院の使用石材のほとんどが20cm～30cm角に作られた石ブロック(現地産の岩石で、安山岩・玄武岩)を相互にかみ合わせたり、小さな石でつないだ石積みである。また、仏像も多くは等身大であり、立地にしても人工の丘に建立している違い等、印度からの仏教伝来経路を南と北に異にして仏教建築の構造・芸術が異なっていることに興味を覚える。

寺院の階段を登って行くと3段階の場面に分れる。最初はカマドウと言って日常の物質的な面を表し、第2段階がルパダトゥといい、もう少し精神的なもの、第3段階がアルパダトゥで、最も高度な抽象と世俗からの離脱を象徴する世界が、彫刻により表象されているという。現在最下段の浮彫は部分的にしか見られないが、カマドウの歓喜と悪が象徴された彫刻。次いでアルパ



第9図 ボロブドゥールの寺院(朝日旅の百科より)



第10図 ボロブドゥールの寺院の円形台より

ダトウの段では、人間存在のより高次元を追求する必要に醒めたシッダルダゴータマ皇子の出来事が彫刻され王子の像が見られる。ここでは8～9世紀のジャワの歴史と文化がある。最後がアルパダトウの世界であり、総延長2,500mに達する浮彫の教えを受けて、最上階に達した頃には自然と仏陀の教えが身につく、物事を成し遂げた満足感と生存の自由の歓びに浸れるということである。

方形基壇から円形台座に登ると、釣鐘状の格子組みをしたダコブ(小さな率塔婆)が巡り、その数72個を数える。その中には、裸体で座る等身大の仏像が見える。一部ダコブや、裸で立つ仏像の頭部が欠けているものがあるが、イスラム教が偶像崇拜を禁じた時代に信教徒たちが取り除いたのではないとも言われている。

遺跡全体を見下ろせる頂上には、飾り気のない巨大なストウパーが立っている。最上段のテラスからは、周辺の山々の麓まで続く広大な椰子林が穏やかに展開する光景は、心に潤いを与えてくれる。

この寺院遺跡の特徴は、2万6千点にものぼる絵画的装飾パネルと、ストウパーに納められた仏像が72体、他の仏像を合わせると504体にのぼる。基壇部の面積約48,000m²・彫刻面2,400m²・浮彫の壁面が1,500mに及ぶ。4層の方形基壇と3層の円形台座、そして最上階の中心に聳えるストウパーを含めて約40mの大塔となる。使用石材は約30万点を数えるというから、千年前にこの巨大な宗教芸術作品を構築した古代人の高度にして、発達した技術が存在していた事実に驚嘆するばかりである。ちなみに建築に約1世紀延1万人の労力を費やし、この修復には26億円余をかけたときく。

第6日目 (バリ島)

ジョクジャカルタ→デンパサール <自由行動>

メイン通りのジャランガジャマを散策し、近くのブラジャガトナタ寺院を見学する。寺院は最近の建立で、白いサンゴでできたヒンズー寺院。隣にあるバリ博物館は、1932年にオランダが建てたもので、バリ美術品・木彫品・石器時代の遺物・椰子の葉の初期本等が収められている。中でも仏教やヒンズー教の青銅製美術品をすばらしく感じた。

第7日目 (デンパサール→香港経由大阪空港)

世界で最も古くから人間が住んでいた国といわれるインドネシアは、1万以上の島々からなり、人類史の全段階が見られる広域な島国とも言われ、外来宗教を超えて残る多種多様な伝統がある。機会があれば再度訪問したい国である。

(長関和男＝当センター調査課嘱託)